

歐洲に於ける外科的結核 に対する治療狀況

醫學博士 渡邊傳二

緒言

余は嘗て歐洲に於ては外科的結核特に骨、並に關節結核に対する特種の療養所の存することを聞いてゐたので、肺結核の外科的療法を見學する傍、この方面をも特に關心を持つて視察し種々裨益さるる所が多かつたので、之を記述して見渡いと思ふ。

Tuberkulose-Krankenhaus der Stadt Berlin, Beetz-Sommerfeld (Direktor: Dr. Ulrici). この病院は既述(前號)せる如く肺結核を主とする病院ではあるが外科的結核の患者も亦多數收容されてゐる。之等の患者は肺結核患者とは病棟を異にし、更に小兒の骨、關節結核は大人とは分離して收容してある。この小兒病棟は他の建築物とは全然隔離して建てられて1劃を形成し、外來者との面接は無論のこと、兩親の訪問さへも1週1回といふ様に非常に制限してある。此處では大人の「脊椎カリエス」に對しては「ギブス床」を用ひず、小麦の藁を極めて細小に截斷し、之を4角形の木の綿袋の中に敷き込み、厚さ約5寸位のものとなし(之を Heckse と云ふ)、之を床上に置き、其の上に患者を横臥せしめてゐる。之等の患者は晴天の日には病床を終日「バルコニー」又は屋外に引き出し、全裸となして日光浴を行はしめ、又患者をして腹位をとらしめて、罹患脊椎部をも含めた背部を日光に曝露してゐる。爲に患者の皮膚は赤褐色に灼けてゐる。全治に近づく時は「ギブスコルセット」を着用せしむ。

小兒の「脊椎カリエス」には「ギブス床」を用ひてゐる。Heckse の「ベット」では小兒は轉び落ちるが爲である。其の他の關節結核では夫々「ギブス繃帶」を施して、雨雪の時以外は終日終夜屋外に

起居せしめ、又歩行器を着けしませ芝生の上を裸體で飛び廻らせてゐる。「ギブス繃帶」は之を巻き



Liege Halle にて日光浴中の患兒。(左側に見ゆる柵附「ベット」は幼兒用のもの)

し後其の上に「ラック」を塗り、「ガーゼ」を張り着け、之を3、4回反覆してあるがため「ギブス粉」の剝脱することが無く、又清拭が可能であるから、「ギブス繃帶」を長く清潔に保つことが出来る。又「ギブス繃帶」は切半して兩側にて綴り合す様になし、常に罹患部を清潔に保ち、又局所の日光浴に便ならしめてゐる。

北歐の常として晩秋から初春にかけては曇天が續き日光に恵まれないがため、この季節には人工太陽燈の照射を行つてゐる。要之、骨、關節の結核に對しては局所の固定、安靜と日光療法とを主とし、X線治療、又は靦血的療法は行はない方針を探つてゐる。特に小兒に於てはX線照射によりて Epiphyse を損傷し、骨の發育を傷害することありとして、Ulrici 氏は小兒に對してX線治療は絶對的禁忌なりと言つてゐる。減鹽食、又は無食鹽食等は與へず普通食を攝取せしめ、唯小兒には肝油、Cebion 錠等を投與してゐるのみである。其の他の注射、又は内服薬等は全然試みてゐない。之等小兒患者は長年月收容されてゐるがため、之等小兒のため Kindertagelernin 保母をおき毎日午前中學課を修めしめてゐる。又之等の小兒は1、

2週間目の日曜日に慈母の來訪を受けるのみであつて、其の間は看護婦が母に代りて何彼と面倒を見てゐる。

Hamburg 大學の Eppendorf Krakenhaus (大學附屬病院)の整形外科教授 Man 氏も亦骨、竝に關節結核には X 線療法を不可なるを説き、Ulrici 氏と同様小兒なれば Epiphyse を傷害し、骨の發育を妨ぐるを以て特に不可なりと言つてゐる。氏も罹患局所の安靜と全身の日光浴、榮養の増進とを計るのみにて可なり、只大人の治癒困難なる關節結核なれば關節切除を行ふこともあるも、小兒にては全く對症的療法のみにて可なりと、余に再三説明された。氏の教室でも減鹽、無食鹽療法等は試みてゐない。教授は更に大學の教室とは全然別個に Hamburg 郊外の Alten-Eichen ……此處は日本に馴染深い Hagenbeck 動物園に近い……にある氏の「アリアート」の整形外科病院に余を伴ひ、多數の「小兒脊椎カリエス」の治療狀況を見せて下さつた。この病院には小兒の「脊椎カリエス」のみを收容してゐる。肺結核を合併せざる患兒に對しては1年中、晝夜の別なく屋上の Liege Halle に「ベット」を引き出し Liege Kur を行はしめてゐる。興味あることは1人の患兒に對し、必ず2箇の「ベット」を用意してあることで、1箇は板「ベット」の上に薄い毛布を敷きしもので、其の上に「ギブス床」を置き、小兒を其の中に横臥せしめ日光の照射する箇所に置いてある。他の「ベット」は普通のもので日蔭に置き、日光の照射せざる時はこの「ベット」上に横臥せしめて玩具遊び等をなさしめ、小兒をして窮屈な「ギブス床」より解放し、病感を忘れさせ様にしてゐる。この2箇の「ベット」を巧に使用することによりて、小兒は食慾も衰へず、數箇月一數箇年の長きに亙り倦むことなく、朗に治療を繼續することが出来るとのことである。龜背のある患兒でも決して牽引を行はず、「ギブス床」の龜背に相當する部を「ギブス」にて徐々に厚く補填して行き、龜背を矯正せしめてゐる。

之に依りて麻痺症狀の既に現れてゐる患者でも完全に矯正治癒せしめてゐる。「ギブス床」は一般に深く必ず頭部を附着せしめてゐる。「ギブス床」内には可なり厚く綿を布き、其の上を木綿布で包み肌觸りを良くす。幼兒では「ギブス床」を廣い布を用ひて背部に固定し、患兒の「ギブス床」より脱落するのを防いでゐる。「ギブス床」は半箇年に1回は必ず造り直すことにしてゐる。この病院でも女教師を備ひ、午前中患兒のため學習を怠らぬ様注意してゐる。斯くて恢復に近づけば「コルセット」を着用せしめて退院を許す。

Oskar-Helene-Heim (Berlin-Dahlem, Kronprinzallee 2291) この病院は Oskar, Helene の夫婦 (何れも夫婦の Vorname) の寄附により Krüppelfürsorge の始祖である Prof. Bisalski によりて 1912 年起工、1914 年完成されたものである。この内にある不具者授産所 Schulungsanstalt für Körperbehinderte は餘りにも有名であるが、之は後記して、茲ではこの病院に於ける外科的結核の治療狀況のみを記すこととする。此處にも骨、關節結核の患者が非常に多い。之等の患者は病室に收容せず、全部 Liege Halle に横臥せしめてゐる。日光の照射する間は Liege Halle から「ベット」を引き出して日光浴をなさしめ、曇天雨天の時は Liege Halle 内に引き込むのみで1年中室内には入れない。龜背ある「脊椎カリエス」患者には極軽度の牽引を行つてゐる。即ち「ベット」の頭部を高くし、軽度の斜位をとらしめ、頭部に極軽い錘を附し、體の下方に滑落するを防ぐ程度とし、足部には錘を附けない。「ギブス床」には全部頭部と下肢部とを附す。即ち全身が「ギブスシヤール」の中に篋まり込む様にす。輕快に趣く時は「ギブスコルセット」を着用せしめ、更に通常「コルセット」に移行す。

學齡期の兒童には林間にて授業をなし、映畫を觀賞せしめ、又圖書の設備もある等知的進歩に注意を拂ふことは前記の諸病院と同様である。

附記. Schulungsanstalt für Körperbehinderte 不具者授産所. 種々の整形外科的疾患によりて不具者となれる人々に職業の再教育を行ひ、経済的に獨立せしめやうとする設備は獨乙國內各所に見られるが、この Oskar-Helene-Heim の Schulungsanstalt 授産所は獨逸最古のものであり、又規模も大なるものとして有名である。製本、整形外科器械、指物、截斷、製靴、簾細工、製圖部等の諸部に分れ、何れも小さいながら工場組織となつてゐる。又別に Stenographie, Maschinenschreiben, Korrespondenz 等を教授する部もあつて、余の訪問當時 14 歳より 20 歳迄の不具者がこの部に 27 名收容されてゐて、其の内上肢切断術を受けし者が 11 名もあつた。

この不具者授産所の年限は各部とも 2 箇年にして、之を修了せる後は夫々の工場に働き、又は獨立するのである。

Das Institute für Wirbeltuberkulose vom Deutschen Roten Kreuz (Dresden の近郊). 此處の主任は Dr. Finck で病床數 55 箇、「脊椎カリエス」患者のみを收容してゐる。「ギブス床」には必ず頭部を附着せしむ。局所病變の著明なる當初は「ギブス床」に下肢部をも附着せしめ、頭部より足脛迄全身を「ギブスシャーレ」の中に嵌め込ませてゐるが、病變の輕快と共に下肢部は漸次短縮し、先づ膝關節迄、次いで臀部迄に切除短縮す。龜背あるも牽引を行はずして、「ギブス床」の龜背に相當する部に脱脂綿を徐々に重積し、龜背部を徐々に押し込み矯正する様努めてゐる。小兒では「ギブス床」を寸時も體より離れしめざる爲幅廣の布帶を持つてこの兩者を丁寧に纏絡してある。患者を屋外に出して日光浴を行ふ時でもこの纏絡を解かず、「ギブス床」に縛り着けし儘抱へ出してゐる。斯様に終日「ギブス床」に固定し、横臥せしむるも食欲の減退もなく、栄養状態も良好、皮膚は黒光りしてゐる。1 週に 1 回この固定を解き患者の體を清拭す。無鹽療法も X 線療法も行つてゐない。

輕快と共に「ギブスコレット」を着用せしむ。

Heilanstalten Hohenlychen (Mecklenburg). Hohenlychen は伯林の北方にある寒村で、伯林の Stettin 驛を發し、途中 1 回乗り替へて Hohe nlychen 驛に着く、伯林から 2 時間以上の汽車行程の所である。この病院は 1914 年建設されしもので、前院長は Bier 教授の門下 Eugen Kisch 氏であつた。Kisch 氏は Leysin の Rollier 氏の高原結核療養所に對し、平地療養を主張した。即ち外科的結核に對して日光療法の効果あるは紫外線の作用のみでは無く、赤外線の効果も亦大なりとし、必ずしも紫外線の豊富なる高地を選ばずとも平地にて可なりと説いた。氏は又赤外線發生裝置 Kisch 氏燈を旺んに使用したものである。斯様な意味からしてもこの地の病院も Leysin の Rollier 氏の病院と共に外科的結核の治療方面では相當有名なものである。現在の院長は Prof. Gebhardt で、氏は München 大學にて Sauerbruch 教授に、次いで故 Lexer 教授に師事した人で、1933 年院長として赴任したのである。又 Gebhardt 氏は伯林の Reichs-Sportsfeld (舊オリンピック競技場) にある Sportsinstitut の Klinische Abteilung の主任をも兼任してゐて、1940 年の「東京オリンピック」には是非日本に行き度い等と言つてをられた。50 歳位短軀の運動家らしい人で、「ナチス」色の相當濃い人の様だ。現在ではこの病院は Sportsbeschädigter (競技に因る負傷者) を主として治療してゐる。其の他外科的結核、脊髓性小兒麻痺等の病棟もある。次に之等病床數の割當を示すと、

「スポーツ」に因る受傷者	150—200 床
外科的結核	150 床
脊髓性小兒麻痺	100 床

で、現在では外科的結核はこの病院の主體ではない様だ。

「脊椎カリエス」には全部頭部を有する「ギブス床」を使用せしめてゐる。この病院では關節結核

に對して多數の手術的治療を行つてゐる。股關節結核、膝關節結核に對して關節切除を行ひ強直を以て完全に治癒せしめしものを多數示説して呉れた。併し之等の症例は何れも重症のものにして、輕症のものに對しては常に安靜療法と日光療法とを行ふ方針を採つてゐる。關節手術の際、無菌法に特に注意を拂ふことは當然であるが、この病院では驚くべき嚴重さであつた。關節手術の時には原則として手術者と器械系の看護婦以外は誰も手術室に入れない。遠來の余を手術室に導きし時も vorsichtig! を連發して遠方から覗かすだけだつたのには全く閉口した。患者は前日に入浴し、手術直前に局所の剃毛をなし、局所の「エーテル濕布」をなして手術室に運ぶ。其の後の局所の消毒操作も非常に嚴密に行つてゐた。併し術者の手術衣の袖が餘りに短きため、護謨手袋と袖との間が5、6寸も離れてゐて、其處から髭深い肘關節部が露出してゐるのは周圍の無菌操作の餘りに嚴重なるに比し寧ろ滑稽な感を懷かしめた。

記附。餘談に屬するが、次いでにこの病院の最も重要な部門である「スポーツ」に因る外傷外科の状況を瞥見して見よう。1933年秋 Gebhardt 教授が本院に來任してより1937年9月迄の間に「スポーツ」外傷後手術を行へるものは次の1481名である。

Meniscus Ausschneidung	1113
Entfernung von Meniscusregeneration	21
Entfernung von Knieganglien	24
Kreuzband Sekundärnähte	43
Kreuzband Plastik	28
Seitenband Seidenzügerplastik	91
Teilplastik des Kniegelenks	106
Gelenk Totalplastik	55
	1481

即ち、「メニスクス」の切除が大部分を占めてゐる。手術後の後療法には非常に注意を拂ひ、Gebhardt 教授も極力之を力説してゐた。この篇

には各種設備の完璧を期してあることは申す筈もないが、特に眼を惹くのは25人の女「マツシスト」Pflegerinが各自多數の患者を分擔して「マツサージ」、「ギムナステック」等を行つてゐる壯觀であつた。之等のPflegerinは全部MünchenにあるProf. Böhmの經營するKranken Gymnastik Schuleで2箇年半の課程を了へたものである。斯くて或程度迄活動力を恢復した患者はWerkdienstをやつてゐる。之は前述のOskar-Helene Heimに於けるSchulungsanstalt für Körperbehinderteと共に最も古きものの1つである。當時この工場に50名の患者職工が働いてゐた。併しOskar-Helene-Heimの工場組織に比すれば規模は小である。

瑞西 Leysin Sanatorium(Direktor: Prof. Rollier) 南瑞西にある Leysin 高地への登山列車は Aigle を起點とし、「アプト式」の登山列車で軌道を攀ち登ること約40分にして Leysin Village 驛に着く。

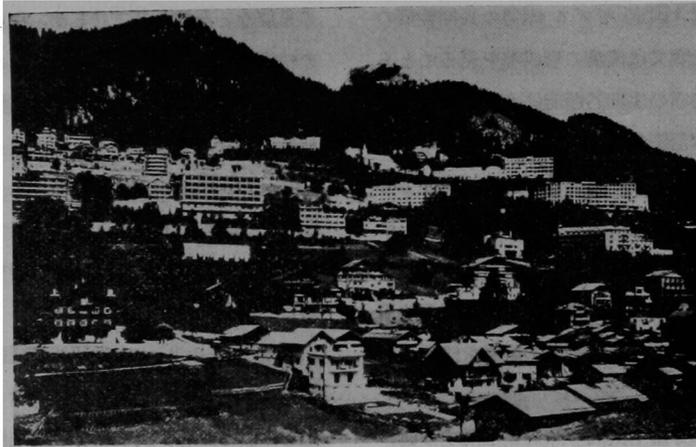
骨、關節結核と言へば直ちに Rollier 氏の「レザン療養所」を想起する程餘りにも有名なものである。余は8月の某日此處を訪づれた。余は前日「ジュネーブ」を出發し、「ジュネーブ湖」の北岸を汽車で走り、バイロンの詩と幽邃の趣きとで有名な湖畔の古城(Chataux)を眺め、湖畔の果樹園の間を走り、「レザン」山麓の小驛 Aigle に着き1泊した。瑞西と言へば風景絶佳なる平和境を想ふのであるが、群雄割據の時代もあつて、古來尚武の氣象が非常に強い國民であり、ウイリヤム・テルの如き正義の武人も描かれてゐるし、又現在到る處に當時の面影を偲ぶに足る古城が聳えてゐる。

「レザン」は一大高原で、「サナトリウム」の散在する附近は海拔1250m—1550mの高地で、東、北は山を負ひ、南は瀾然として遙にモンブランの高峰を望む、1年中を通じて殆ど無風で、日光の照

射なき日も極めて稀である。高山特有の空気の清澄さと乾燥せるために誠に爽快を覚え、日光は身に浸みて強く、Heliotherapie には最適の地と言へよう。雨も非常に少く、時に霧の襲来することもあるも、其の濃度は健康に障碍を及ぼす程度のも

のでは無いとのことである。

1年の平均温度は夏期は攝氏12.7度、冬期は零下5度、平均湿度は56.8%である。冬期と雖も無風にして日光の照射があるため、裸體で「スキー」を行ふことが出来る。



Leysin の Sanatorium 地帯全景

Rollier 氏は Kocher 先生の門下で、其の助手として外科的結核は観血的療法のみにては治癒するものに非ずと考へ、1903年この地に外科的結核の療養所を開設したのである。時に氏は30歳であつた。爾來30餘年間氏の理想は着々と實現し、病棟32箇、病床數1200床に達し、其の名聲は世界に普く、患者の訪るる者歐米諸國よりは無論のこと、余の訪れし時印度の某豪族が其の家庭醫を伴ひて入院してゐるとのことだつた。全く外科的結核治療上の一大偉業である。余の訪問せる當時は歐洲の經濟界が不況なりしたためか、入院患者も非常に少く700名位しかあつた。入院料は5「フラン」を最低とし、20「フラン」を最高とす。之には診療費其他全部を含む(1「フラン」は當時邦價の約80錢強)。

この療養所を訪るる各國からの醫學徒も随分多いと見え、夫等に対する應接の如きも全く行き届いたものである。應接室には各種の骨關節結核は無論皮膚、眼、耳等殆ど總ての結核症の治療前後の「レ線」寫眞及び普通寫眞等を陳列して縦覽に

供してある。

ロリエー氏の外科的結核に對する治療法は一種獨特である。即ち Heliotherapie in Verbindung mit der Arbeitskur と稱し、患者をして適度の勞作を行はせながら日光療法を行ひ、罹患關節を可動の儘治療に越かしめる主義を採つてゐる。

余は茲にロリエー氏の外科的結核に對する治療方針を聊か詳述したいと思ふ。

近代病理學は外科的結核が局所性疾患に非ずして、全身感染の局所的發現に過ぎざることを立證した。故に治療法も局所的と同時に全身的療法をも併用しなければならぬ。寧ろ後者を重要視すべきである。皮膚は生理的竝に細菌學的に固有の身體抵抗器官であり、物質代謝の調節器官でもある。故に日光療法に依りて皮膚を強化することは身體の生理的機能を進せしめ、結核菌に對する抵抗力を強大ならしむる結果となる。又日光療法に依りて神経系統を刺激し間接には内分泌機能をも進せしむ。局所的には鎮痛、及び殺菌の兩作用を現はし、皮膚各層の肥厚、及び病竈の癩癩化

等をも促進す。故に日光と新鮮なる空氣とが之等疾患の治癒に最も大切なるものなることは明かである。

重症患者が氏の「クリニック」を訪れし當時の状態を見るに皮膚は蒼白にして、貧血し、而も萎縮してゐる。又屢々固定「ギプス」繙帶の長期装着のため、皮膚の糜爛又は潰瘍の形成等を見ることもある。之では皮膚の生理的機能は大半障害され、悉いては疾患の治癒を抑壓することにもなる。日光療法は一定の Schema に従ひ、最初短時間より漸次延長し、照射區域も漸次擴大す。併し局所に應じて、又個人の敏感度に應じて多少參酌して實施するを要す。斯くて病的皮膚は徐々に色素沈着を増し、抵抗力を強化し、生理的機能を快復して來るのである。

ロリエー氏が身體全表面の照射を推稱する他の理由は日光の筋肉系統に對する著明なる影響である。日光浴のために起る身體深部の充血、及び熱作用に因りて筋肉は常に攣縮運動を起し、自ら強化し、生理的機能を再び快復することが出来る。筋肉の機能快復によりて罹患關節も亦其の生理的機能の快復に向ふことが出来る。この事實は非常に重大なる意義を有するものであると言つてゐる。日光療法は靱帶及び骨骸に對しても、其の機能快復を促進するものである。即ち礦物質代謝を旺盛ならしめ、骨の「カルシウム」吸収力を充進せしむ。

氏が獨特の療法を開始して以來既に 30 有餘年の間、關節切開も、關節切除術も行はない方針を採つてゐる。腐骨の除去は只混合感染を起せる時に行つてゐる。開放せざる病竈に於ては腐骨は自然に吸収されるが故に剔出の必要を認めない。手術的侵襲を加ふる時は手術それ自身が既に局所に對する大なる外傷であり、局所組織を破壊して其の抵抗力を著しく低下せしめるものである。之がため手術創は却而混合感染の門戸となる場合多し。混合感染は結核それ自身よりも却而危

險なることは明かである。

氏は閉鎖性「ギプス繙帶」は生理的竝に整形外科的にも甚しき矛盾であるとなし、決して之を使用しない。「ギプス繙帶」を長期に亙りて着用せば皮膚及び筋肉は萎縮し、前述せるが如き之等器官の重要な機能を低下せしめ、引いては罹患局所の快復を著しく障碍する結果ともなる。又局所の絶對的安靜と、局所を日光より遮斷することとは局所に於ける骨の「カルシウム量」の減少を來し Osteoporose を招來するものである。斯くの如く「ギプス繙帶」を長期に亙りて着用することは如何なる點よりするも局所には悪影響を及ぼすものであると言つてゐる。

氏は「脊椎カリエス」竝に他の關節結核に對して伸展法を行ふことあるも、之は徐々に關節面の壓迫を除去し、骨、及び軟骨の壓迫性潰瘍を防ぎ、神經の壓迫症狀を除去するを目的とすることは言ふ迄もない。

以上の理由よりして氏は堪へず適度の關節運動を行はせつつ、局所竝に全身の日光療法を行つて罹患部の強直を起さずことなく治癒に趣かしめる主義を採つてゐるのであるが、この目的に適ふものが氏の Arbeitskur である。即ち Arbeitskur によりて關節の生理的機能を保持し、患者の全身血行を可良ならしめ、體温を調節し、神經系統の平衡を保ち、物質代謝を促進せしむ。又同時に精神的にも良き影響を與ふるものである。又 Arbeitskur は經濟的補給の手段としても甚だ好都合なものである。即ち斯の如き長期抵抗を要する疾患の治療に際しては經濟的逼迫のため、治療を中絶するの已むなきこと屢々であるが之に依りて治療を長く繼續せしめ得、又退院後に於ける職業再教育の點等から見ても Arbeitskur は大切なことである。氏が勞作を治療の目的に最初試みたのは 1909 年 Leysin に Arbeitskolonie を創設せる時に始まる。即ち Leysin にて藤細工、家具類を小規模に製らしめた。翌 1910 年 Leysin 附近の Cergnat

に於て小規模の農場を開始し、恢復期にある患者をして農事に従事せしめた。

次いで 1930 年 1 月 1 日 國際工場病院 Internationale Klinik-Werkstätte を開始した。この工場病院は 120 床を有し盛大なものである。

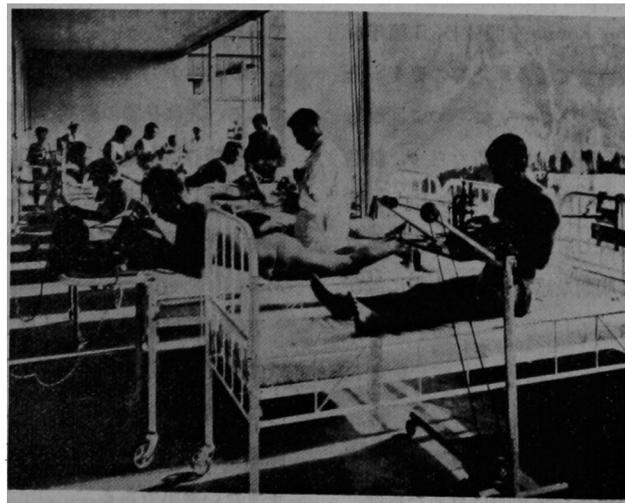
この Arbeitskur を實施して以來「脊椎カリエス」股關節其他各種の關節結核、又は結核性腹膜炎患者等に試みしも未だ病勢の悪化せしもの、又は合併症を併發せしもの等 1 例もなく、規則正しき勞作は患者に對し、疲勞感、體温上昇、及び局所障碍等を訴へしむること無く、却而一般狀態の恢復と相俟つて局所の治癒機轉を促進させるものである。

以上が Rollier 氏の外科的結核に對する治療方針の概要である。

病棟を巡覽するに患者は何れも病室外の「バルコニー」に「ベット」を引き出し、黒光りの裸體を並べて日光浴をしてゐる。「脊椎カリエス」の患者は「ギブス床」を用ひず、Hirse Korn Kiese (黍粒を充した器) の上に全裸で横臥せしめてゐる。流注體瘍は穿破の危險あるものは穿刺排膿を行ふも然らざるものは其の儘放置し、罹患部の治癒と共に自然に吸収されるを待つ。

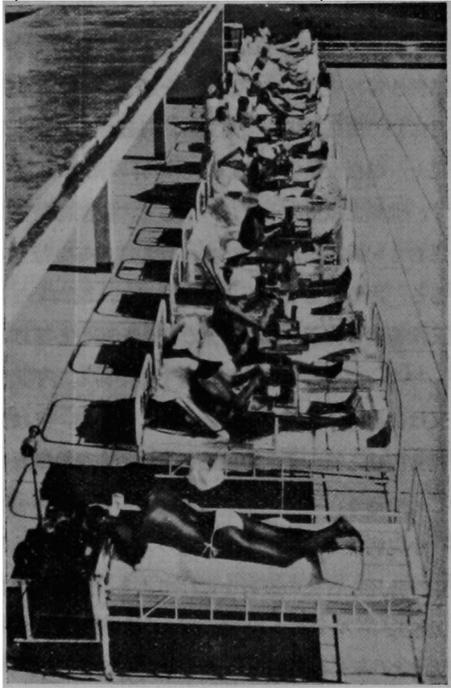
脊椎の畸型あるも壓迫障碍の無きものには牽引を行はない。佛國にてアルゼー氏手術を行ひ、瘻孔を留めし 1「脊椎カリエス」患者も腹位に横臥して黒光りの裸體を日光に曝してゐたが瘻孔は殆ど完全に治癒してゐた。又他病院にて開腹手術を受け、數箇所に瘻孔を造り無月經となれる 1 女性の結核性腹膜炎患者に日光療法を繼續すること 2 箇月にして瘻孔も完全に閉鎖し、月經も再開せるを見た。結核性潰瘍に對しても特別の治療を行はず、唯日光療法のみを行つてゐる。膝關節結核の患者も局所の固定を行はず、日光浴のみを行つてゐる。之等の患者は床上にて讀書し、編物をなし又は蒼空を仰ぎて斷雲の飛び交ふを眺むる等終日「バルコニー」にて日光浴に過すのである。内服薬、又は注射等は殆ど行つてゐない。無食鹽、又は減鹽食療法も試みず、野菜類を比較的多量に攝取せしめてゐる。

小兒病棟では「バルコニー」の天井に紫色硝子を引ひ強烈な日光の直射を避けてゐる。工場病院を見るに「バルコニー」又は屋上に「ベット」を並べ夫等の「ベット」には各々電氣動力を導き「ベット」上に取り着けた各種機械を動かして、機械の小部分品、電氣器具、電話器、運動具、「スリッパ」



「バルコニー」にて器械部分品製作中の Arbeitskur.

木箱、麻製品、美術品等を製作してゐる。又「ミシン」を動かして各種の裁縫をも行つてゐる。快復期の患者は「ベット」を離れ、全裸の儘なる器械を運轉し、筋肉労働に従事してゐる。



屋上に於ける Arbeitskur.
黒光りする裸體を見よ

Rollier氏は1910年より Leysin 附近の Cergnat に Schule an der Sonne を開校し、1箇年を通じて虚弱兒童を收容してゐる。之等の兒童も全裸で、冬は雪眼鏡を着け「スキー」に乗つて通學してゐる。Leysin には Rollier 氏のみならず、肺結核専門の内科醫 Cardis、外科の Dr. de Rahm 等も「クリニク」を開設してゐる。之等の大小多數の病棟は見るからに明朗な感を與へ、山腹に並び建つ様は一大偉觀である。

總 括

余は歐洲に於ける代表的外科的結核療養所を視察し得たが、其の治療法を概括的に見るならば、非顯血的療法を最も可なりとする方針には諸家一

致してゐる。X線治療も行はない方針の人が多く無食鹽、又は減鹽食療法を試みてゐる人も極めて稀である。

全身の日光療法と新鮮なる空氣とを最も重要な治療劑とし、全身療法を重要視してゐることは諸家全く同一である。局所は「ギブス繃帶」其他の固定器を用ひて絶對安靜を持續せしめ、局所の一時的運動機能の停止を以て治癒せしむる一派の學者多きも、Rollier 氏の如く何等固定装置を使用することなく、堪へず罹患關節を軽く動かしつつ治療し、關節を可動状態の儘治癒に趣かしめる學者もある。Rollier 氏の斯の如き治療にて永久治癒を得ることが出来るならば眞に理想的の療法であるが、Rollier 氏の「クリニク」で所謂治癒して退院するも間もなく再發を來すものが非常に多いと非難する人も多い。併し氏が日光を唯一の治療劑として、其の名聲世界に普及せるは其の地が療養に最適にして、四季を通じ強烈にして紫外線量の豊富なる日光と清澄にして湿度低き空氣との恩恵を完全に享受することが出来るが爲である。獨逸の如く1年の内冬期半箇年は日光の照射極めて稀なる國、又吾國の如く湿度高く、而も塵埃の多き國にては日光のみを唯一の治療劑とすること能はずして局所の固定等の補助法を必要とするのではあるまいか。

Arbeitskur は各療養所に於て旺んに試みられてゐる。之は身體の適度の運動ともなり、自ら經濟的補給の道を講じ、惹いては長期に亙りて治療を繼續せしめる手段ともなり、又精神的苦痛を軽減せしむる等の諸點から極めて有效なる治療法である。

吾國は肺結核患者の最も多き國とされ、其の撲滅は國民の保健衛生上焦眉の急務であるが、又同時に外科的結核に對しても大いに意を用ひ、歐洲諸國に於けるか如き特種療養所の出現を切望して止まない次第である。